

第 37 回

# 摂大農学セミナー



主催：摂南大学農学部先端アグリ研究所

連絡先：摂南大学農学部事務室

SETSUNAN.Obu@joshu.ac.jp

072-896-6000

摂南大学農学部の研究成果を広く知ってもらい、産官学の連携を推進するために**摂大農学セミナー**を開催します。無料・一般公開のセミナーとして、毎月開催しております。本セミナーは摂南大学農学部を会場にした公開セミナー、またはオンラインによるライブ配信で開催いたします。開催方法は、セミナーごとにお知らせします。多くの方のご参加をお待ちしております。

【開催日時】 2022年12月19日（月）15:00～16:30

【開催方法】 無料・一般公開

【視聴方法】 **Zoom** によるライブ配信

【発信会場】 8号館 8303 教室

#### 【プログラム】

15:00-15:05 はじめに

先端アグリ研究所 所長 教授 椎名 隆

15:05-15:45 落葉果樹のライフサイクルと地域連携の取り組み

農業生産学科 講師 北村 祐人

(座長 寺林 敏)

15:45-16:25 卸売市場の存立基盤の変容と活性化の課題

食農ビジネス学科 教授 小野 雅之

(座長 濱田 英嗣)

16:25-16:30 おわりに

食品栄養学科 教授 吉井 英文

#### オンラインセミナー参加方法

- ・オンラインのライブ配信（Zoom）で開催します。
- ・次のHP よりお申し込みください。  
<https://forms.office.com/r/YD6NK4MCT7>
- ・メールでの参加申し込みも受け付けます。
- ・お申し込み後、視聴方法についてメールでご連絡いたします。
- ・詳しくは摂南大学農学部 HP(<https://www.setsunan.ac.jp/agri/>)をご覧ください。



# 落葉果樹のライフサイクルと地域連携の取り組み

農業生産学科・講師 北村祐人  
yuto.kitamura@setsunan.ac.jp

## 【講演要旨】

### 1. 果樹はいかにして冬を越して花を咲かせるのか？

四季の存在する我が国において、多年生の果樹は毎年同じ時期に花を咲かせて果実を実らせるために、厳しい冬を乗り越えています。さらに果樹は一時的な冬季の暖かい日を春が来たとは誤認せず、暦上の春が来てから開花し、その後果実をつけます。これは「自発休眠」と呼ばれ、一定の低温を経験しなければ開花しないという防御機構として、遺伝的に制御されている現象です。

しかし、近年の気候変動により冬季の気温が上昇し、この低温要求量を満たせずに開花が不揃いになってしまうという問題が顕在化してきています。このため、各果樹の低温要求量を数値として評価し、その制御要因を解明して将来の安定生産につなげることが求められています。

これまでの研究では、落葉果樹の中では最も早い季節に花を咲かせるウメを用いて、開花に必要な低温を実験的に数値化することを試みました。その結果として、和歌山県の代表的な品種である‘南高’の温度要求量モデルを構築するとともに、開花期を予測できるプログラムを作成しました。また、亜熱帯地域原産の低温要求量が極端に少ない品種を比較に用いることで、温度要求量の遺伝的な制御要因を探索しました。これらの成果は、将来の気候に適応した安定生産や品種育成につながるものと期待されます。

### 2. 地域の特産品としての果樹

多くの自治体には、生産規模の程度の差はあれ「特産の果物」というものがあります。そのような地域資源を掘り起こし、地域の活性化を目指すことも果樹園芸学の役割の一つです。ここでは、これまでの取り組みと今後の展望についてお話しします。

果実加工品の開発 農研機構で育成されたニホンスモモ×ウメの品種‘露茜’を中山間地域の活性化素材とするため、その栽培から加工までの研究を行いました。加工用果実としての省力栽培法の検討に加え、効率的な果実の追熟や高品質な加工品製作に関する研究を、地域の飲料メーカーや生産者と共同して実施し、商品開発にまでつなげました。

新規品目の創出 上記のような種間交雑による品種は、その珍しさから貴重な新規品目になる反面、そもそも交配が成功しない、成功しても生育途中で枯死する、などの問題を抱えることがあります。そこで、ウメやスモモを含むサクラ属果樹において、相互の交配親和性を検証するとともに、胚発達不全や花粉不稔性など、交雑個体の発達異常に影響を与える要因を探索しています。

現在も枚方市を中心とした摂南大学周辺地域において、果樹を活性化材料とした都市型の果樹生産および利用の取り組みを行っています。これまでの経験や科学的な知見を現場に還元することを常に意識しながら、研究活動を進めていきたいと考えています。

# 卸売市場の存立基盤の変容と活性化の課題

食農ビジネス学科・教授 小野雅之

masayuki.ono@setsunan.ac.jp

## 【講演要旨】

今日の社会では、多種多様な商品やサービスが生産・提供され、それが消費されています。そして、消費のためには生産と消費を結ぶ流通の役割が欠かせません。流通は社会にとっての「血液の流れ」とは言っても過言ではありません。

ところで、商品の流通形態は、商品の持つ特性や用途、生産と消費の特性などによって異なります。農水産物の流通にも同様に多様性があります。わが国の農水産物を流通形態によって大きく分けると、卸売市場を経由して流通する農水産物（野菜、果実、水産物、牛肉、豚肉、花き）と、卸売市場を経由しないで流通する農水産物（米、麦類、大豆、生乳、鶏肉、鶏卵など）に分けることができます。さらに、前者の農水産物も全てが卸売市場を経由するわけではなく、実際には多様な流通形態がみられますし、後者も品目によって流通形態が異なります。これらのなかで、ここでは前者の農水産物の流通において大きな役割を果たしている卸売市場について取り上げます。

卸売市場とは、多数の生産者と多数の最終消費者が存在し、しかも野菜や果実のように品質が劣化しやすい農水産物を迅速かつ効率的に流通させるために、流通過程の中間において、国内や海外の産地から多くの種類を大量に集荷し、買い手との間で取引を行う流通施設です。集荷・品揃え、分荷・配送、価格形成、代金決済、情報受発信などの流通機能を果たしています。

わが国で卸売市場が本格的に整備されるようになったのは 1923 年に「中央卸売市場法」が制定されたことによります。その後、卸売市場の数が増加するにつれて卸売市場での取引量・金額が増加し、1990 年前後にピークを迎えました。当時は、国内で流通する野菜、果実、水産物、花きのなかで 80%前後が卸売市場を経由していました。

その後は、消費量の低迷・減少や消費形態の変化、流通環境の変化などによって、卸売市場での取引量・金額が減少してきました。なかでも、国産農水産物の流通形態の多様化や輸入加工品（冷凍野菜、果汁など）の増加が大きな影響を与えています。卸売市場取引量・金額が減少する過程で、卸売市場数や市場内の流通業者数も減少してきました。また、政府の農産物流通政策にも大きく変化が現れてきました。その結果、卸売市場の存立基盤が大きく揺らいでいるのが今日の状況です。

このような状況のなかで、卸売市場がこれからも野菜、果実などの流通において役割を發揮していくためには、どのような取り組みが必要なのでしょう。この点を中心にお話をします。